

公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団
2015年度（後期）一般公募「在宅医療研究への助成」完了報告書

「訪問看護師が感じる実習指導の困難と学習ニーズ」

申請者：青柳 道子

所属機関：北海道大学大学院 保健科学研究所

共同研究者：照井 レナ

所属機関：旭川医科大学医学部 看護学科

提出年月日：2017年3月31日

I. はじめに

わが国では、高齢者人口が 2025 年には約 3,500 万人に達すると推計されており¹⁾、疾病を持ちながら居宅で生活する重度要介護者や認知症高齢者が増加することが予測されている。そのような人々と家族を支える訪問看護の需要は、ますます高まることから、2025 年には現在の訪問看護師数の 4 倍強に当たる約 15 万人の訪問看護師が必要であると推定されており²⁾、訪問看護師の人材育成および確保は急務である。これまで多くの訪問看護ステーションでは、病院施設での臨床経験者を採用してきたが、上記のような背景を鑑み、近年は新卒看護師を採用する取り組みがされてきている³⁾。看護教育において、学生は在宅看護論および実習を通して訪問看護の実際を学んでおり、これらの科目における学びの質を高めることが、未来の在宅医療を担う人材確保には重要である。

在宅看護論実習は主に訪問看護ステーション（以下ステーション）で行われる実習であり、看護実践の場が療養者の居宅であるため、多くの場合教員は同行することができない。したがって、病院で行われる他の実習とは異なり、教員が学生の看護実践を直接見て指導する機会が無いという指導上の課題がある。その分、実習指導者である訪問看護師からの指導が、学生の学びの質に大きく作用すると考える。一般に看護学実習に関わる看護師は、様々な困難を感じていることが明らかにされており⁴⁾、おそらく訪問看護師も同様に何等かの困難を感じていることが推察されるが、その実態は明らかにされていない。多くの実習生を受け入れる大学病院等では、実習指導の質向上のために看護師を対象とした研修があり、指導上の困難の共有や指導方法に関する学習が行われている。しかし、ステーションの多くは小規模事業所であるため、実習指導に関して体系的に学習する機会も時間もないことが予想される。また、在宅看護論実習に特化した指導者の研修はこれまでほとんど報告されていない。これらの状況から、訪問看護師のニーズに基づく、実習指導者研修のプログラム開発が必要であると考えられる。

そこで、本研究では、実習指導を担当する訪問看護師のニーズに基づく研修プログラムの開発の基礎資料とするために、訪問看護師が感じる実習指導の困難の実態把握と、学習ニーズを明らかにすることを目的とする。

II. 調査方法

1. 協力者

看護系大学および専門学校の在宅看護論実習を受け入れている 2 都市の訪問看護ステーションに勤務する看護師 9 名、管理者 9 名の計 18 名を対象とした。

3. 調査方法

- 1) 調査期間：2016 年 11 月～2017 年 2 月
- 2) 調査場所：訪問看護師が所属する施設の個室または個室に準じた場所
- 3) データ収集方法：研究協力者に 30～60 分間の個別インタビューを各 1 回、半構造化面

接法を用いて行った。面接内容は、実習指導者の許可を得て録音とメモによって記録した。

4) インタビュー内容

実習指導で感じる困難についてインタビューを行った。また、実習指導に関して知りたい、学習したいと思っていることについて希望を尋ねた。

5. 倫理的配慮

北海道大学倫理委員会の承認を受けた（承認番号 16-55）。対象者に研究の主旨、研究協力の任意性と中断・中止の自由、プライバシーの保護、データの厳重管理および結果の公表について書面と口頭で説明し、署名による研究参加への同意を得た。

Ⅲ. インタビュー内容の概要

1. 訪問看護師の背景

訪問看護師の年代は 30～60 代，看護師が 8 名，副所長 1 名，所長 9 名であった。

2. 訪問看護師が感じる実習指導の困難

1) 実習指導の運営面の困難

訪問看護師は、通常の訪問業務をこなしながら指導に当たるため、十分な時間をとって学生に指導ができないと感じていた。学生が行く訪問は実習指導者としての役割がある看護師がすべて同行できるわけではない。学生には様々な看護師が関わることから、学生がどこまでできているのかを把握することが困難であると感じていた。成績評価を学校から求められる場合もあるが、評価することに責任を感じ、妥当に評価できているのかを不安に思っていた。このように、訪問看護師は自分たちの指導に関して迷いながら指導していることが語っていた。また、他の業務との兼ね合いの難しさも語られていた。

2) 指導が困難な学生

看護師は、学生の中には在宅看護論実習に興味ない学生がおり、そのような学生がいると、指導する意欲がそがれると感じていた。また、対人関係をうまく持てない学生が多くなっていると感じていた。利用者宅に訪問した際の、マナーや態度が悪い学生がおり、看護以前に社会人としての指導も必要である状況が語られた。

3) 教員との困難

看護師は、教員と自分たちとの間で、学生の達成度や学ばせたいことについて意見の相違があると感じていた。

3. 訪問看護師の実習指導に関する研修ニーズ

研修ニーズはありの回答となしの回答があった。下記にニーズありと回答した看護師の意見を集約する。

1) 時期・日程

時期に関しては、実習がない時期、実習が始まる前の春先という希望が多かった。日程に関しては、勤務時間内、土日という意見が多かったが、小さい子供がいる場合は土日や夜間に時間を作って研修に参加することは難しいという意見があった。

2) 期間

短いものだと半日、長いものだと1～2週間という希望があった。週に1回継続的な研修の希望もあった。

3) 場所

所属する訪問看護ステーションがある市内の希望であった。市内の大学という意見もあった。また、ステーションに教員が赴く形式の希望もあった。

4) 内容

- ・実習前に在宅看護に関してどのような教育をしているのか(カリキュラム・講義内容)
- ・看護教育の現状
- ・大学で教えている在宅看護論の概要と教育目標
- ・他の訪問看護ステーションで工夫している指導方法
- ・具体的な指導の方法、事例
- ・学生にどのように声をかけたらよいのか・対人援助技術
- ・学生を指導するときのポイント
- ・学生に実習で何を伝えるのかのポイント
- ・看護師が学生にやっていることの意味や意図を伝えられるような技術
- ・大学教育としての実習指導の意味
- ・現在の若者の特徴・心理
- ・世代間ギャップについて
- ・学生が興味を持っていることや望んでいること
- ・学生が在宅看護にどのようなイメージを持っているのか
- ・教員が指導者に求めること

5) 方法

- ・体験型セミナー
- ・指導した事例を展開し、持ち寄ってグループワークをする

- ・大学の講義に参加する
- ・学生と交流の機会を持つ
- ・特に研修という形ではなく、報告会の開催や学生指導のポイントを冊子にして配布するという意見もあった

IV. 調査を終えて

インタビューでは、訪問看護師がこれでよいのかという迷いの中で実習指導を行っていることが語られていた。このような悩みは、病棟で学生指導を担当している看護師の場合も同様であり⁴⁾、実習指導者に共通した困難であると考えられる。このような迷いを軽減するための方策としての学習機会はやはり必要であると考えた。

また、教員との関係性に困難があることが語られていたが、今後はますます在宅看護に関する教育の重要性が高まると考えられ、そのためには訪問看護ステーションと教育機関が密に協働できる体制を作りあげていく努力が必要である。

学生に関する語りは、牛久保ら⁵⁾の研究結果と類似していた。教育機関において、実習前に学生の興味関心を高めるような働きかけや、対人技術を高めることが必要であると考えられる。

今後の課題

今後は、訪問看護師が感じる実習指導の困難をより詳細に質的帰納的に分析を進め、実習施設である訪問看護ステーションと教育機関がどのように連携して困難の解決を図るのかを検討する予定である。また、本研究の内容を踏まえて、具体的な訪問看護師の実習指導に関する学習方策を考え、実施、評価をする予定である。

インタビューでは実習指導者が困難に感じていることに対し、いかに工夫、対処をしているのか、また、実習指導のやりがい等についても語られていた。今後は、その点についても分析を進めていきたいと考えている。

謝辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただきました訪問看護ステーションの所長様、実習指導者の皆様、訪問看護師の皆様に心より感謝申し上げます。

なお、本研究は公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成を受けて実施いたしました。ここに感謝申し上げます。

感想

上記にも書きましたように、今回の研究では訪問看護師が実習指導で感じる困難に焦点を当てましたが、これは看護師の方々が感じていることの一部でしかありません。インタビューでは、これらの実習指導上の困難を感じながらも、看護師の方々はおおらかに学生を

受け止め、将来の看護を担う人材を大事に育てようとしてくださっているお気持ちが伝わってきて、教育に携わるものとして大変ありがたく思いました。このような気持ちで看護師の方々が実習指導をしてくださっていることを、学生にも伝えることが、学生の学習意欲を刺激するのではないかと思っています。また、今回のインタビューを通じて、自分は教員として何を学生に教育したいのか、どうしていくべきかを改めて考えることができました。今後は一層、訪問看護の現場と教育機関がよりよく協働してけるように活動をしていきたいと考えております。

引用文献

- 1) 厚生労働省, 第1回介護施設等の在り方委員会資料4, 2006
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/09/dl/s0927-8e.pdf> (2016年5月8日)
- 2) 公益社団法人日本看護協会, 公益財団法人日本訪問看護財団, 一般社団法人全国訪問看護事業協会, 訪問看護アクションプラン 2025 2025年を目指した訪問看護,
2015:9.
- 3) 長江弘子, 吉本照子, 辻村真由子, 他. 自律的な新卒訪問看護師を育成する. 看護教育 2013;54(10):920-926.
- 4) 佐々木史乃. 看護学生の実習指導における臨床看護師の体験. 日本看護学教育学会誌 2015;24(3):27-38.
- 5) 牛久保美津子, 飯田苗恵, 小笠原映子, 他. 訪問看護ステーションにおける訪問看護実習受け入れに関する状況. THE KITAKANTO MEDICAL JOURNAL 2015;65:45~52.